



17世紀オランダとの関係をしのばせる有田焼の皿

江戸時代の鎖国体制下に長崎・出島のオランダ商館だけが西洋文明との接点であり、日本は「蘭」を忘れていた。

日本との深いつながり

オランダ紀行②

学(らんがく)として多くのことを学んだ。しかし、もうすっかりそのことは忘れている。

藤屋 侃士
(下松市幸ヶ丘)

十七世紀はオランダの黄金時代と言われる。実は我が家にも当時をしおるものがあるのに気づき、びっくりした。写真の有田焼の皿、よく見ると中央に「VOC」のマークがある。

一六〇二年に設立されたオランダ連合東インド会社の略称が「VOC」。VOCの東洋貿易がオランダに巨額の富をもたらした。その面影を残す皿、これがイミテーションでなければ我が家のお宝なのだが……。

オランダ語が語源の今使われている言葉も相当ある。ランドセル、オルゴール、レンズ、ピストルなど、添乗員が教えてくれ

ただけでもかなりの数で

あった。

歴史で習ったシーボルトもその一つ。彼はドイツ人だが、一八一三年、長崎のオランダ商館の医者として来日。「日本動物記」や「日本植物記」で当時の日本をヨーロッパに紹介している。彼が持ち帰った

トチの木がオランダ最古の大学、ライデン大学に植えられていると司馬遼太郎の「オランダ紀行」の中にある。

とにかく日本とオラン

ダの関係は深い。我が家

の庭に咲くチューリップの花は娘がアムステルダムに立ち寄った際に持ち帰ったものだ。世界有数の花の大國オランダ、チューリップはその代表格だが、今や日本各地に咲き誇る。

オランダチューリップの最大の輸入国は日本とアメリカである。ランセル、オルゴール、レンズ、ピストルなど、添乗員が教えてくれ

トルコが原産のチューリップは

今では花天国オランダの花



となり、チューリップ・バブルが起ころ。史上最高値で取り引きされた「センパー・アウグストゥス」といふチューリップの球根一個と家一軒が交換されるほどで、今もチューリップと交換された家がホールンという街に残されている。白い花びらに赤い血管が浮き出たような斑(ふ)入りの球根一個が三十五万円、当時の大工の労賃が「日七円の時のことだ。やがてチューリップ・バブルは崩壊する。「チューリップ」を「土地」に置き換

いと思う。

今回、福岡から直行便が就航したからという単純な動機で旅したが、戸時代に深い関係のあるオランダを旅して本当に良かった。しかし、明治時代に入り、オランダとの関係が薄くなつたのが惜しまれる。今からでも司馬遼太郎が健全な「市民国家」と呼んだオラン